広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第40号　2012．3〉

習得から活用，探求への音楽科学習マネージメントサイクルの研究開発（３）

泉谷　正則　　向井さゆり　　大橋美代子　　三村　真弓
濵本　恵康

１．はじめに

これからの教育の課題は何なのか。OECD（経済協力開発機構）は，PISA調査の結果から日本の子どもについて，勉強離れが進んでいることを指摘し，次のような課題を提起した。

○　思考・判断・表現する能力を必要とする読解や記述が苦手である。
○　知識・技能を活用する能力が低い。
○　家庭での学習習慣や生活習慣の水準の低さ。学習意欲の低下。
○　自信の欠如。将来への不安。体力の低下。

新学習指導要領では，このような課題を背景として，「実社会・実生活に生きて働く力としての確かな学力」の育成を重視し，各教科においては「基礎・基本を習得させるとともにそれらを知識・技能として活用できるものにしていく」ことを述べている。

本学園の音楽科では，このような今日的な教育課題に対応し，音楽的能力の確実な習得と，それが生きて働くものとして生涯に渡って音楽を愛好する種となることを目的としながら，基礎・基本となる「共通事項」や技能の「習得」，それらの「活用」，さらに「探求」といった音楽科教育におけるマネージメントサイクルを開発し，実践研究によりその有用性を明らかにしようと試みてきた。

これまでの研究で重視してきたことは，次の４つの点である。

①　新学習指導要領で新設された「共通事項」（強弱，リズム，速度など音楽を形づくっている要素の知覚・感受）を習得させる。
②　「習得」，「活用」の過程に思考の拡散と収束といった創造的思考を働かせることにより，学習をより深める。
③　異学・異校種による学習形態を活かす。
④　音楽科のカリキュラムで課題とされている「創作分野」での研究を進める。

昨年度は，異学年・異校種による創作の授業において，児童・生徒が意見を活発に交流する場面を意図的に仕組むことによって，各個人の既習内容の共有，深化を図った。そのなかで課題となったのが次の３つの点である。

①　達成感のもてる学習内容の設定や，演奏能力の向上が必要であったということ。意見を活発に交流できるだけでなく，創りあげた音楽から感動を得ることのできる学習にしていくということ。
②　評価について詳細な研究をすること。生徒の作品や演奏をどのように評価していくのかということ。
③　系統性をもったカリキュラムづくりを進めることただ題材を並べるだけのものではなく，幼・小・中の12年間でどのような能力を系統的につけていくのかという視点でのカリキュラムをつくる必要があるということ。

以上の課題を踏まえながら，本年度は，次のことを中心に研究を進める。

○　これまでに引き続き，音楽科学習マネージメントサイクルについて，実践検証していく。
○　幼・小・中一貫音楽科カリキュラムを試案する。

つまり，どのような方法で学ぶのか（音楽科マネージメントサイクル）の実践検証を継続しながら，さらに，何を学ぶのか（幼・小・中一貫カリキュラム）について研究を進めていく。

２．音楽科学習マネージメントサイクル

本研究が提案する音楽科マネージメントサイクルでは，次のような学習の場を意図的に仕組む（図１参照）。

【習得】

「共通事項」（強弱，リズム，速度など音楽を形づくっている要素を知覚・感受，また，それらを表す用語や記号）を確実に「習得」させる。

Masanori Izumitani, Sayuri Mukai, Miyoko Oohashi, Mayumi Mimura, Yosiyasu Hamamoto: Research and development of study management from acquisition to investigation (3)

【活用】
　創造的思考（思考の拡散と収束）を働かせる。知覚・感受したものを言語（話し合いなど）や非言語（演奏，身体表現など）で交流することによって，より深化させる。
【探求】
「習得」「活用」によって蓄積された能力をもとにしながら，音楽について根拠をもって批評し，より豊かな表現などを「探求」する。
　このような学習サイクルを発達段階に応じて繰り返すことによって，基本的な音楽的能力やそれを活用する能力が培われ，豊かな情操や生涯にわたって音楽を愛好する態度といった音楽科教育の目的へとつながると考える。

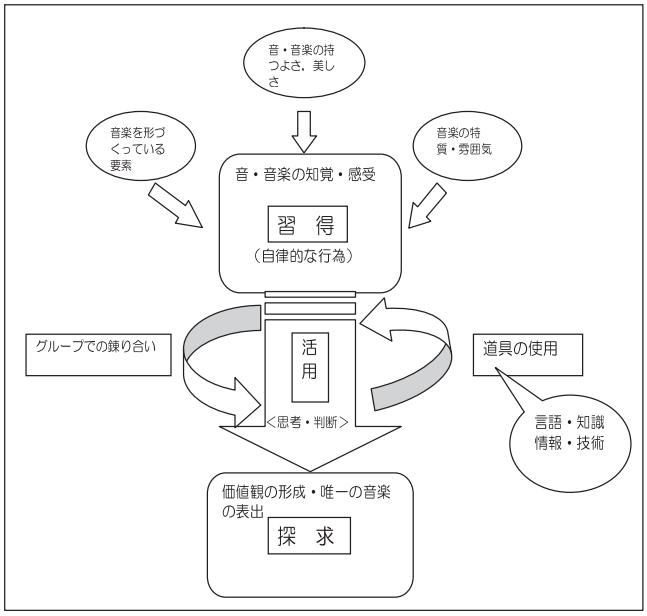


図１　習得から探求の音楽科学習マネージメント[1)]

３．幼・小・中の系統的な音楽科カリキュラムの試案

　学習は連続しながら積み重なっていくものである。児童・生徒は，以前の学習と現在の学習の関係を意識できるから動機づけられる。学習に連続性や系統性を持たせていくことは，児童・生徒の関心を高め，確実に力をつけさせていくために不可欠なことである。
本年度，学習内容に系統性を持たせていくために，小・中一貫音楽科カリキュラムとして，表１のように試案した。
　このカリキュラムを試案するにあたって，まず考えたことは，「目標となる能力をできるだけ分かりやすく分類する」ことである。以下，それらについて説明する。
【関心・意欲・態度】
　すべての場面で不断に求められる行動である。どのような目標をもった授業や場面においても，音楽活動に積極的な感情をもって取り組むことは常に意識されるべきである。
【できる】
　器楽や歌唱などの技能の習得である。
【かんじる】
　指導要領で言う「感受」にあたるもので，音楽を形作っている要素やそれらの関係から，何らかの感情を抱いたり，イメージ（色や情景など）を浮かべたりする行動である。
【わかる】
　２つの行動からとらえる。１つは，音楽の要素やそれらの関係を「知覚」することである。もう１つは，音楽の要素やそれらの働きを表す用語や記号，楽器の構造や音楽の歴史的・文化的背景などを知識として知ることである。
【価値づける】
　音楽について，自他の演奏について，以上の「できる」「かんじる」「わかる」能力を根拠に，説明したり，批評したりすることである。
　題材や授業展開，扱う合唱曲などは，生徒実態に応じて，また，年度によって変化することは当然である。よって，ここでは，全てのつけたい能力を網羅するのではなく，それらをできるだけ一般化したり，「各学年において新しく学習するもの」や，「その学年で特に重視したいもの」を述べた。そして，（例）を説明することで，学習がよりイメージしやすくなるように考えた。このように幼・小・中一貫のカリキュラムをとらえていくことで，連続性を持ちながら，確実に能力を培うことのできるような授業づくりを可能にしていく。

５．授業の実際

（１）学年
第４学年
（２）題材
　拍の流れにのろう
（３）ねらい
　拍の流れにのって，拍子を感じ取りながら表現したり聴いたりすることができる。
（４）学習内容
　リズムカードと５音（ミ・ソ・ラ・ド・レ）を使って，４分の４拍子のおはやしの旋律をつくる。

幼・小・中一貫音楽科カリキュラム（試案）

校種	学年	関心・意欲・態度	できる 技能	かんじる 感受	わかる 知覚	知識		価値づける
		◆音楽活動への関心・意欲・態度	◆鍵盤ハーモニカ，リコーダー，その他の楽器，合唱，指揮	◆音楽の要素やそれらの関係が醸し出す気分や感情や雰囲気を感じたり，色や情景などのイメージをもつ。	◆音楽の要素やそれらの関係がわかる。	◆楽器の構造や奏法，演奏形態 ◆作品の歴史的・文化的背景	◆音楽の要素やそれらの働き表す用語や記号を知る。	◆音楽の良さについて，根拠をもって説明する。
幼稚園								
小学校	1	○楽しく歌を歌ったり，体を使って表現しようとしている。	○鍵盤ハーモニカ （ドのポジションで5指） ○歌唱 （模唱で歌える）	○題材からイメージをもつ （例）『はるなつあきふゆ』を「くじら」は元気よく，「ふわり」は優しく，といったイメージをもつ。	○一定の拍がわかる。 （例）一定の拍で手拍子ができる。 ○強弱の変化がわかる。 強弱	・打楽器		（例）私は，音が強いので，明るい感じがする曲だと思います。
	2		○鍵盤ハーモニカ （ポジション移動で5指） ○歌唱 （ド～高いドまでの音程を正しく歌える）	○音楽からようすや気持ちを思いうかべる。 （例）『人形のゆめと目ざめ』の速さやリズムの違いから，曲の様子を思いうかべる。	○打楽器の音色の違いがわかる。 （例）『森のカーニバル』で演奏されている打楽器の音色を聴きわけることができる。 ○2拍子の3拍子の拍の違いがわかる。 （例）『アラベスク』と『メヌエット』を聴いて2拍子と3拍子の違いがわかる。 ○リズム （楽譜からリズムをイメージする） リズム	・打楽器	・4分音符 ・8分音符 ・2分音符 ・4分休符 ・8分休符	（例）私は，スキップしているみたいだからウッドブロックの方が好きです。
	3	○進んで音楽にかかわり，意欲的に音楽活動をしようとしている。	○鍵盤ハーモニカ （指くぐり，指またぎ） ○ソプラノリコーダー （タンギング，ド～高いレ） ○歌唱 （自然な声の出し方で歌う）	○旋律の音の動きやリズムによる雰囲気の違いを感じる。 （例）『山のポルカ』の前半の旋律のリズムと後半のリズムから旋律のイメージの違いを感じる。	○旋律の音の動き（高低の変化）がわかる。 （例）『メヌエット』の曲想の変化が音の動き（高低）の違いであることに気づく。 高低 速度の変化	・金管楽器	・ト音記号 ・五線と加線 ・ブレス ・付点2分音符 ・付点4分音符 ・4分の4拍子 ・4分の2拍子 ・4分の3拍子 ・タイ	（例）私は，音が高くなったり低くなったりしてはずんで明るい感じがするのでこの音楽が好きです。
	4		○ソプラノリコーダー （高いミファソ） （サミング） ○歌唱 （響きのある声で歌う）	○旋律の終わる感じと続く感じの違いを感じとる。 （例）『とんび』の1・2フレーズの違い（続く感じ・終わる感じ）を感じる。	○2つの旋律が追いかけたり，重なり合っていることがわかる。 （例）『ファランドール』の2つの旋律が追いかけっこしていることに気づく。 音の重なり	・木管楽器	・リピート記号 ・8分の6拍子 ・スタッカート ・付点8分音符 ・16分音符 ・シャープ ・ナチュラル ・p，mp，mf，f ・クレシェンド，デクレシェンド	（例）音が強くなったり弱くなったりして激しいところが迫力があるのでこの音楽がいいなと思いました。
	5		○ソプラノリコーダー （♯ソ，♯ファ） ○歌唱 （遠くに響かせる声で歌う）	○長調と短調の気分の違いを感じる。 （例）『赤いやねの家』と『一輪の赤い花』を聴き比べて，音楽の気分の違いを感じる。 ○和音の終わる感じと続く感じ （例）『威風堂々』の和音進行から，続く感じと終わる感じの違いを感じる。	○旋律のくりかえしや変化に気づく。 （例）『ハンガリー舞曲』の曲想や速さの変化に気づき，旋律が繰り返されるようすがわかる。 （例）『威風堂々』の曲想の変化から旋律が繰り返される構成がわかる。	・琴，尺八 ・弦楽器	・アクセント ・ヘ音記号 ・全音符 ・1番かっこ，2番かっこ ・フラット ・スラー ・長調と短調の音階	（例）『ハンガリー舞曲』を聴いて ・曲がずっと一緒ではなく，場面によって速度の違いがあっておもしろいなと思いました。

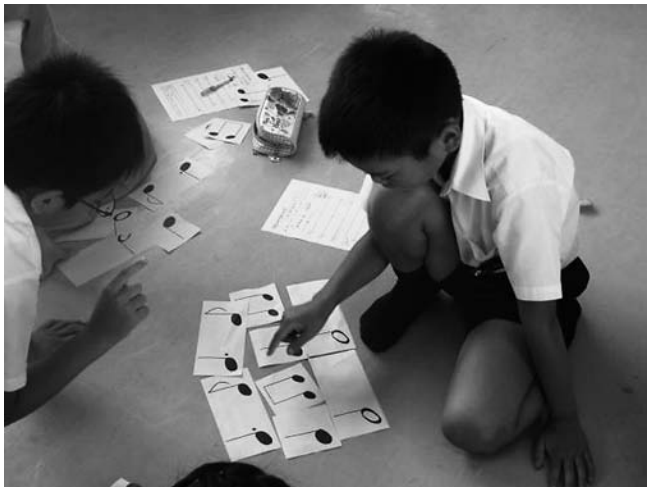
	6	○進んで音楽にかかわり，意欲的に自分の思いを音楽活動に生かそうとしている。	・ソプラノリコーダー （♭シ，♯高いド） ○歌唱 （音が跳躍する時の声の出し方・響かせ方）	○我が国の音楽や諸外国の音楽の特徴を聴き分ける。 （例）『越天楽今様』と『アンデスの祭り』のリズムや旋律の雰囲気の違いを感じる。 ○作曲者が曲にこめた想いを歌詞や旋律から感じとる。 （例）『広い空の下で』の旋律のもりあがりと歌詞から，作曲者が曲にこめた気持ちを感じとる。	○曲想の変化を感じ，音楽の仕組みに気づく。 （例）『木星』の曲想と音色の変化から，音楽の仕組みに気づく。 形式	・日本の楽器 ・世界の楽器	・速度記号	（例）『世界の国々の音楽』について，音楽や楽器の特徴にふれながら，それぞれの音楽のおもしろさを説明する。
中学校	7	○音楽活動を受け入れる。 ○音楽活動に楽しさを感じる。 ○グループ活動をする。 （例）リーダーや伴奏者を中心に，パート練習やアンサンブルの練習をする。	○アルトリコーダー （低いファ～高いソ） （サミング） （タンギング） （二重奏） ○琴 （琴の正しい姿勢や基本的な奏法） ○歌唱 （バランスのよい姿勢） （腹式呼吸で発声） （曲にふさわしい発声，合唱と民謡） （言葉のまとまりをはっきり発音する） （2部合唱，簡単な混声3部合唱） ○指揮 （テンポやタイミングをそろえる）	○音楽の要素が醸しだす雰囲気を感じる。 （例）『春』について，バイオリンの高音で張りのある音色，軽やかなリズムから，鳥の鳴き声や春の明るい雰囲気を感じる。 （例）『魔王』の音色の変化から，登場人物をイメージする。 （例）「主は冷たい土の中に」の4つのフレーズの違い（続く感じ，終わる感じ）を感じる。 （例）「カリブ　夢の旅」の前半（静かでなめらか）と後半（力強く，弾んだ）の曲想の違いを感じる。	○音楽の要素がわかる。 （例）『春』を聴いて，次のことを聴きとる。 ・各楽器の音色 ・各楽器の相対的な音高の違い ・リズムや強弱の変化 ・形式（ソロと合奏） （例）『魔王』を聴いて，登場人物による音色の違いに気づく。 様々な音楽の要素	・アジアの諸民族の音楽 ・琴，尺八 ・日本の民謡	・音符・休符 ・「音高の変化」「強弱」「反復」「速度」「演奏の仕方」などを表す記号 ・既習の音符・休符によるリズム （3連符を含む） （16部分音符・休符は含まない） ・大譜表と音名 ・長調と短調の音階 （全音と半音） （階名，主音，調号，臨時記号） （ハ長調，ヘ長調，ト長調） （イ短調，ニ短調，ホ短調） ・音程 ・三和音 （和音記号，主要三和音） ・主旋律，と副次的な旋律 ・旋律の重なり （オクターブ，ハーモニー，追いかけ合い） ・フレーズ（旋律の自然なまとまり） （例）「演奏の仕方」を表す記号 『春』の楽譜にある「tr，」（トリル）という記号とその奏法を知る。	（例）「映画音楽」を聴いて，作曲者がそのイメージを表現するためにどのような工夫（速度，リズム，強弱，楽器の音色など）をしているのかについてく説明する。
	8	○音楽活動に自ら関わろうとする。 （例）パート練習等で，練習の進め方や表現の工夫について意見を言おうとする。 （例）リーダーや伴奏者に立候補する。 （例）授業内容と関連した音楽を探し，学校外でも音楽を聴いたり，演奏会に行ったりする。	○アルトリコーダー （♯ファ，♭シ） （二重奏） ○歌唱 （のどを開き，胸腔，鼻腔を意識して，より響きのある歌声） （歌詞や言葉の意味や語感に応じて，歌い方を変える） （混声三部合唱） ○指揮 （左手で表現する）	○音楽の要素や要素同士の関係による曲想の違いを感じる。 ○歌詞の語感（言葉から受ける主観的な感情）を感じる。	○音楽の要素や要素同士の関係がわかる。 （例）『夏に日の贈りもの』の4小節の旋律の階名と音の高低を視覚的に書き出し，歌った時の強弱の変化との関係に気づく。 要素と要素の関係	・パイプオルガン ・オーケストラの楽器 ・世界の諸民族の音楽（歌） ・日本の郷土芸能 ・歌舞伎 ・文楽 ・オペラ ・ア・カペラ	・16分音符・休符を含んだリズム ・パートの名前 （ソプラノ，アルト，男声） ・パートどうしの音量のバランス （主旋律，飾りの旋律，和音をつくる音） ・コードネーム ・曲の形式 （1部形式，2部形式，3部形式） （ソナタ形式，フーガ）	（例）ベートーヴェンの『交響曲第五番』について，ソナタ形式（2つの主題の性格とその変化，コーダの役割）やオーケストラの楽器の音色に気づきながら，この曲の良さを感じ，説明することができる。
	9	○音楽活動に自ら関わり，高めようとする。 （例）生徒による指揮者を中心に，意見を交流し合いながら，より豊かな合唱表現を追求しようとする。	○アルトリコーダー （♯ソ，♯高いド） （三重奏） ○歌唱 （のどを開き，胸腔，鼻腔を意識して，美しく迫力のある歌声で歌う） （混声四部合唱） ○指揮 （歌詞や曲の雰囲気を体全体で引き出す左手で表現する）	○音楽の要素やそれらの様々な関係が醸し出す曲想の違いを感じる。 （例）『ブルタバ』を聴いて，音楽の要素（楽器の音色，強弱，リズムなど）によって醸し出される様々な情景を想像する。	○音楽の要素やそれらの様々な関係に気づく。 （例）『風の中の青春』の4つのフレーズについて，3つのパートの役割（主旋律，副次的な旋律，同じリズムでハーモニーとなる旋律）の変化と，それによる音量バランスの変化に気づく。 要素同士の様々な関係	・クラシック音楽の名曲 （合唱，器楽，オーケストラ，バレエ音楽，オペラ） ・雅楽，能 ・世界の諸民族の音楽（器楽） ・ポピュラー音楽 （ロック，ジャズ） ・日本の音楽の歴史 ・音楽著作権 ・音楽史 （西洋，日本）	・タイのついたリズム	（例）西洋音楽の歴史から，ある時代の音楽の特徴を様々な既習内容を使って詳しく説明しながら，その時代の音楽の魅力について説明することができる。

（5）活用を促す手立て

５音を使った「おはやしの旋律（２小節）」を一人ひとりがつくり，グループでアイデアを出し合って旋律をつなげる活動を通して，一つのおはやしの旋律に仕上げていくことができるようにする。

（6）活動の実際

第１時では，一人ひとりが４種類の音符を使ったリズムカードを並べながら４分の４拍子に合うリズムづくりを行った。音符についての知識が習得できている子どもは，数種類のリズムカードを組み合わせてつくっていた。しかし，音符についての知識が十分でな興味をもちはじめ，自然に互いのリズムを見合うようになっていた。そこで，４分の４拍子になっていない友だちに「これだったら，１拍足りないよ。」「これ，多すぎるんじゃない？」と教えてあげたり，同じ音符ばかりを使っている友だちに「全部一緒？」「これ，おもしろくないよ。」と工夫を促したりするようになった。



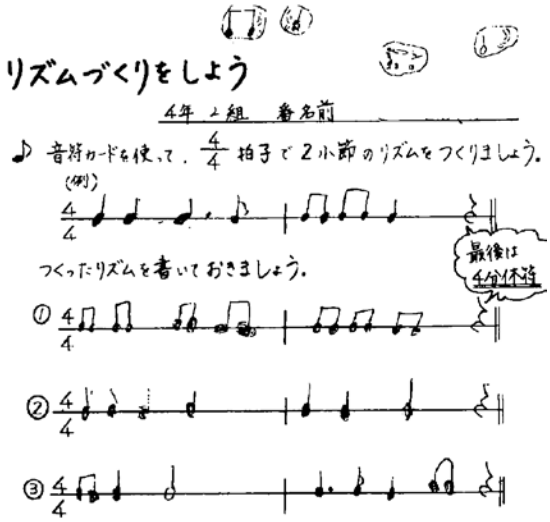
その後，教えてもらったところを直したり，使うリズムカードの種類を増やしたりしてリズムづくりをしていた。リズムづくりの活動を通して，自分のイメージを拡げそのイメージに合う音符カードを選んだり，友だちの声かけから，一人では思いつかなかったリズムをつくったりすることができるようになった。

第２時では，つくったリズムがおはやしの旋律になるように５音を使って旋律をつくっていった。

第３時では，一人ひとりがつくった旋律を組み合わせて，班（４名）ごとに８小節のおはやしの旋律になるようにまとめていった。機械的に組み合わせるとしっくりこないなど，これまでの音楽を知覚・感受してきた経験をもとに，イメージを拡げまとめようとしていた。また，おはやしをこれまでに聴いたことのある子どもからは「おはやしは長い曲だから，くり返して長くしよう」と自分の経験をよりどころにイメージを拡げたり，「ただくり返すだけではおもしろくないから強弱をつけよう」と演奏の仕方の工夫を考えたりしている班もあった。

（7）今後の学習に向けて

意見交流が活発になり新たな視点を持ち学習に深まりがみられるようにするために，子どもの実態を把握し，班編成を意図的に行っていく。



６．成果と課題

音楽科マネージメントサイクルによる音楽的能力の確実な習得と活用による学習の深化について，授業実践を積み重ね，検証を進め，その有効性をさらに確認することができた。各単元における生徒の学習の深化を評価することもできた。課題としては，各単元や各学年での評価を持ち寄り，どの学年でどの程度の力をつけることができたのかを幼・小・中の指導者で確認し合い，次年度の年間指導計画に活かしていくことがあげられる。カリキュラムについて各校種で連携するだけでなく，評価についても確実な連携と次年度へのフィードバックが必要である。

カリキュラムについては，幼・小・中でつけていきたい能力を見通し，形にすることができた。内容についてもさらに校種間で連携が必要であるし，図としての表し方についてもさらに分かりやすくしながら，より有効活用できるものにしていく必要がある。

７．おわりに

これまで,「音楽科マネージメントサイクル」を開発し，本学園の音楽科として，学習指導の「方法」について統一した視点を持ち研究を進めてきた。今年度新たに一歩踏み出した点は，学習指導の「内容」について統一した視点を持ったことであり，それは,「幼・小・中一貫音楽科カリキュラム」として試案した。今後の課題は,「評価」について統一した視点を持つことである。

そして，以上のような「方法」,「内容」,「評価」についての枠組みを実践検証するための授業づくり，生徒が輝き先生も輝ける授業を積み重ねていく。

引用（参考）文献

１）桑田一也　大橋美代子　泉谷正則　向井さゆり　三村真弓　濵本恵康（2011）「キーコンピテンシーを中心に据えた習得から探求への学習マネージメントの研究開発（２）」『広島大学学部・附属共同研究紀要』第39号，pp.213－218.